

「弁護士のススメ」

金子 剛大（TMI総合法律事務所）

気づけば弁護士になって17年。大規模な法律事務所で忙しく頑張ってきました。でも今でもときどき、「あのとき法学部に進んでよかったな」「やっぱり弁護士になってよかったな」と思う瞬間があります。今回せっかく寄稿の機会をいただいたので、進路選びで迷っている皆さんに少しでも参考になればと思い、自分のこれまでの道のりや、弁護士としての今の生活を紹介したいと思います。

サッカー少年から法学部へ

小さいころ、親族に医者が多かったこともあり、子供ながらに「病気の人を治す医者ってカッコいいな」と憧れを抱いていました。私自身も、いつかは医者になるのかも漠然と考えていた時期もあります。

ただ、高校1年の終わりに、文系か理系か、進路を選ぶタイミングで、ふと「せっかくだから周りと同じレールに乗るより、新しい道を進んでみたい」と思うようになりました。そのときに頭に浮かんできたのが、弁護士という職業です。医者と同じように高い専門性があり、人助けにも社会貢献にもつながる。そんな弁護士という仕事に惹かれ、「よし、自分は弁護士を目指そう」と決意しました。

大学受験を経て東大文Ⅰに進学し、そのまま法学部へ。学部時代の私は授業よりもサッカーサークルの活動に夢中で、決して模範的な学生ではありませんでした。サッカー部やサークルでボールを追いかけている時間は無限にあったのに、六法全書の条文はなかなか頭に入ってきません。試験前に慌てて友人のノートをコピーして乗り切ったこともあります（いや、毎回そうでした。）。いま振り返ると、あのころの必死さや仲間とのつながりも含めて、勉強の一部だったのかもしれない。

ただ、そんな中でも少しずつ「自分はどんな弁護士になりたいのか」を考えるようになっていきました。当時、漠然と思っていたのは、「将来何らかの形でスポーツに関わりたい」ということです。小さいころからサッカー漬けで、サッカーに限らずスポーツはやるのも観るのも大好きでした。スポーツが人

に夢や希望を与える力に強い憧れを持っていて、どうにか自分もそこに関わるような仕事がしたいと思っていたのです。

そんなとき、当時のサッカー選手の代理人資格がFIFA（国際サッカー連盟）の試験に合格するか、弁護士資格を持つ人に与えられていることを知りました。「弁護士になれば選手の代理人を務めることもできる。スポーツに関わる一つの形かもしれない」と思ったのを覚えています。サッカー場の外から選手を支える自分を想像し、勝手にワクワクしていました。

升本弁護士との出会い

東大法科大学院に進んだ頃、今の事務所の大先輩にあたる升本喜郎弁護士と話す機会がありました。升本先生は、当時日本代表の絶対的エースだった中田英寿選手がJリーグの湘南ベルマーレ（当時はベルマーレ平塚）からイタリア・セリエAのペルージャに移籍したときに代理人を務めた方で、しかも東大サッカー部のキャプテン出身。弁護士を目指すサッカー少年の私からすれば、伝説みたいな存在です。

印象に残っているのは、先生が「せっかく司法試験のために猛烈に勉強してるんだから、選手の代理人だけやるなんてもったいないよ。弁護士になれば、もっと広くスポーツやエンタメに関われるし、他にもいろんな楽しい案件に関われるはず」と言ってくださったこと。その言葉を聞いて「なるほど、弁護士になれば選択肢はもっと広がるんだ」と強く背中を押されました。

「絶対にこの事務所に入りたい。そして升本先生と一緒に仕事がしたい」と決めて、幸運にも念願かなって入所。その後は実際にたくさんの案件をご一緒することができました。残念ながら升本先生は2021年に59歳の若さで亡くなられてしまいましたが、弁護士・プロフェッショナルとしての姿勢や言葉は今でも自分の中で生き続けています。

弁護士としてのキャリアとやりがい

升本先生との出会いや、そこで得たご縁のおかげで、私自身も自然とスポーツやエンタメの案件を手掛けるようになりました。

ありがたいことに、スポーツ分野ではJリーグの法務委員やBリーグの裁定委員、CAS（スポーツ仲裁裁判所）の仲裁人などを務める機会をいただきま

した。プロリーグやクラブチームのサポートに関わることができるなんて、サッカー少年だった自分からすると夢のようです。試合に出ているわけではないのに、リーグの制度づくりや大会の準備に携わると、選手がピッチに立つ瞬間に「自分の仕事がここに繋がっている」と実感できます。実際にスタジアムに足を運び、観客の歓声に包まれる中で「この試合に関われてよかった」と胸が熱くなる瞬間もあります。

エンタメ分野でも、映画やドラマの制作をはじめ、音楽やキャラクタービジネスなど幅広く関わらせてもらっています。クライアントは業界の第一線で活躍するプロフェッショナルばかり。彼らと肩を並べて議論できるのは大きな刺激であり、自分にとって学びの連続です。作品が公開されて観客に届いたり、関わった大会や試合が不成功したりすると、「裏方をやっていてよかった！」と心から思います。映画の公開初日に映画館でお客さんが笑ったり泣いたりしている姿を見たときには、「あの交渉も無駄じゃなかったな」と思わずニヤリとしてしまうことも。

自分にサッカーの才能があればプロ選手になった、というのが本音です。でも弁護士としてスポーツやエンタメに関わることで、一流の選手やタレント、スタッフ、チームと同じフィールドに立ち、法務の専門家として信頼してもらえる。これはこれで最高に楽しいし、やりがいしかありません。

法学部で学ぶ意味

ちょっと真面目な話もおきましょう。法学部に進んで一番大きかったのは「リーガルマインド」を身につけられたことです。スポーツもエンタメも、必ずしもルールが明確じゃない世界です。時には新しいルールを作ったり、ルールがない中で交渉したりする必要があります。既存のルールの解釈をめぐって当事者間で争いになることも少なくありません。

そんなときに役立つのが、物事を整理し、公平に判断するための法的な思考です。難しい条文や判例と格闘した経験が、社会に出てから驚くほど生きてきます。

もちろん、授業は簡単じゃないです。私も学生時代は理解できないまま教室を出たことが何度もあります。でも振り返れば、その「うーん…よくわからん」という経験も含めて、考える力を鍛えてくれたんだと思います。

アメリカのロースクールに行ったときも強く感じましたが、このリーガルマインドはビジネスの世界では日常的に必要とされています。だからこそアメリカでは弁護士資格を取った人が、必ずしも弁護士だけじゃなく、経営者や政治家、実業家として活躍している。日本でも同じ流れが広がりつつあります。だから「弁護士になるつもりはない」という人でも、法学部で学ぶメリットはめちゃくちゃ大きいんです。

弁護士という仕事の魅力

弁護士の仕事の魅力はなんといっても「自由度」が高いことです。自分で専門分野をデザインできるし、責任は重いけれど、その分挑戦できる幅が広い。私はスポーツとエンタメを専門にしましたが、ほかにも企業法務や国際紛争、M&A やファイナンス、さらには宇宙法 (!?) なんて分野まで広がっています。

それに、弁護士にならないければ絶対に会えなかった人に会えたり、普通なら入れない場所に行けたりすることもあります。好きな分野に専門家として関わられるというのは、本当に幸運なことだと思います。

学生の皆さんへ

ここまでいろいろ書いてきましたが、結局のところ言いたいのは「弁護士は最高に楽しい仕事だよ」ということです。もちろん大変なこともあります。忙しさも尋常ではありません。でもそれ以上に刺激的で、やりがい大きい。

それに、弁護士になるかどうかに関係なく、法学部で学ぶことは必ず役に立ちます。リーガルマインドは日常生活でもビジネスの世界でも大きな武器になり得るのです。

皆さんも大学に入っただけで、「自分に向いているのは何か」と焦ることもあるかもしれません。でも、私自身がそうだったように、進路は一気に決まらなくても大丈夫です。途中で考えが変わることもあるし、寄り道をした経験が後から思わぬ形で役立つこともあります。法学部での学びは、どんな進路を選んでも無駄にならない土台になるはずです。

焦らず、慌てず、じっくりと進路を考えてみてください。サッカー少年だった私が、今こうしてスポーツやエンタメの現場で仕事をしているように、皆さんにもきっと自分なりの道が見つかるはずです。